如海の時宗々学

河野憲善

一

宗において経論釈があり、時宗は経宗であり、浄土三部経を正依とす。別依一経として弥陀経、その「臨命終時」の四字に一代を摂すと。無問自説であつて一経の始終は執持名号にあり、平生の称名は臨終一刹那のためであり、本願の大悲がそこにあるからである。故に「時之一字雖二言微一意広理明也」という。

鸞師の難易二道に准じ、綽師の聖浄二門に拠り、善導を宗師と呼び、その疏の外に余事を説かず六時礼讃を法用とす。鎮西義は観経により定散を分ち『十八通』によれば教行証に約して教相を成すと。時宗は念仏の外の余行を説かない、第十八生因本願の念仏のみであり、釈尊の随自意に出で、本願の大悲であるとともに釈迦出世の本懐であり、その本意は臨命終時の大事であると。

阿弥陀教宗であつて釈迦教ではないが、なお一代の化儀に依るのは釈迦の金口だからである。正宗に称名を説き流通に阿耨菩提をいう、ここに玄秀の『一念発心集』を挙げているが現存しない。本願が生因であることはいうまでもないが、始覚の仏は本覚の衆生に依つて正覚を成就する。衆生の往生が本願の内容をなすからである。これが名号酬因の報身であり、この故に始覚の弥陀は本覚の衆生によつて願を発して名号を以て往生を決定し、始覚の弥陀は本覚の法となり、本覚の衆生は始覚の機となつて始本合成し、凡聖不二機法一体の南無阿弥陀仏と顕れる。酬因の名号は衆生の本覚によつて顕れ、往生は名号により決定する。その一念一時を臨命終時といい、一念口称の端的底である。これ弥陀の己証にして唯仏独り明了であると。

本願力をもつて三世を南無の当念に載る。この一念の時がさきの一念の時である。三心は名号の外なる能領解の三心であつてはならなく、所領解本願の三心でなければならない。わが宗義開出は芝崎道場において玄秀師に承くという。

二

無安心を以て安心とす。機法一体の故である。三心は名号所具であつて機が勧発するものではない。下々品が時宗、従つて時衆の機であり、悪人正機、諸の不善業を具えている。一生造悪の愚人、死に臨んで知識称名を勧めば慈悲加祐して火車化して凉風となる、この逆悪人に何の安心があろうか。若し一派の如く逆者十念満の機とすれば、一息切断すれば重罪を滅することはない。時宗は十念満とは立てない、一念にても十念にても往生の修因決定し、二十一代上人『要法記』による。大信心は如来の心より生ずる、『涅槃経』の文であり、明闇もと体なく、名号は明であり、これが万善万行を具して生因決定する。本願に十方衆生とあることが五逆闡提を含むということであり、宗家は唯除を抑止門とする。阿鼻に入る業ではあるが、二尊の内証一意であり摂取門となる。本願の除逆は未造の機の為である。

当流の安心、五逆重罪を一機に収めてしかも無安心である。三心は所領解にして名号の所具である。したがつて念仏が念仏をするのである。

三

三心とは安心であり、往生を信ずる心であり、菩提に趣向する心であり、その体は大善地法の忍許澄浄を義とする。凡夫は平生に何の三心があり得ようか、時宗においては慈悲が加祐の故に名号所具とし、本願の三心自然にしてあるという。

観経の三心は能領解の三心であり、釈迦教の三心である。大経の三心は所領解の三心であつて弥陀教の三心という。三心に能所を立てるのは七祖託何の『器朴論』に出で、筆者如海は玄秀からこれを承けている。鎮西義に横竪の三心あり、観経は竪、大経は横の三心、横竪は源空が一心三観から立てられた名目であるといつている。三心次第するのが竪、一が他二を具するのが横、横竪ともに能領解ならば、時宗の安心ではないが、時宗二祖他阿は鎮西義を承けて明かに横竪の三心を説いている。

時宗は端的にいつて三心所廃の法門であり、能領解を否定し、選択の願心より発す弥陀因中の三心を安心とする。仏智より計られた真実深心をもつて衆生の本覚に廻向したまう信心は果号の六字に納められている。末世濁悪においては三心の体は六字名号と顕れ、自己に具する三心を廃し、六字に具する三心を立てる。これを離の三心という。

宗祖の御義に「三心とは但だ名号なり。ゆえに至心信楽欲生我国の文、これを称我名号と釈せり。爾らば称名の外に全く三心あることなし」と。三心四修五念みな南無阿弥陀仏なり、これによつて名号には心を入るとも心に名号を入るべか

らず。その故は名号は信不信ともに称すれば往生す。他力不思議の故である。自力我執をもつてとかくあげつらうべからず、極楽は無我の土であるから我執をもつて往生すべからずとある。

機をまた機に勧めないから所領解という、他力だからである。能領解が観経に説かれているのは初信のための方便であり、たとい真実心中三心を起すといえども雑毒の善ならば虚仮であり奸詐百端である。衆生の意地を嫌い棄つるのであり、身命を捨て心のなきを心とする、このことは他力名号に没入し、仏力自然のままにあることである。名号だけであるから独一名号という。三心は定散要門の施設であり、純他力においては能領解から所領解への転入がなければならない。宗祖は即施即廃といつている、また無安心をもつて安心とするともいう。所領解においては一心不乱の一心であり、独一名号にして随自随他の差別もなく、機の差別も亡ずるという。これは十劫正覚が衆生の本覚に帰命しているからであり、名号の外に三心はあるべからずという。

三心四修の趣、機の上にあるならば凡情の善悪であつて出離の要道ではない。唯々南無阿弥陀仏が往生するのであると。念仏は方法であることから目的になり、さらに名体不離に止揚される。宗家の釈九帖の文々句々只名号であり、長門顕性の三心所廃の法門を称揚した宗祖の語を引いている。

二祖他阿が南条九郎に示して云く、煩悩の厚薄を謂わず罪障の軽重を論ぜず、唯口称すれば声則ち往生であると。九郎問う、妄念の上の唱名でも是かと、師答う、善悪に心を用いず生きながら身命を智識に譲つて我を我とせず心を心として用いず名号とともにある、これが他力である。要するに三心は機の三心ではなく仏の側にある。所領解とは人が受けとることであり、機の深信も法の深心も仏が廻向せられるものである。

往生は名号故自然虚無にして青黄赤白黒の色にもあらず、長短方円の形にもあらず、思量すれども義味に落ちず、声に任せて唱うれば無窮の生死を離ると。名号の外に安心がないということは機知を泯じたる格外の安心ということができる。安心は学解ではない、人我を離れているからである。一向に愚痴に還り、万事を天運に任せて報仏の聴許を金磬に響かす念仏は、信心を踊躍に顕わす姿となる。解悟を離れた単直仰信の振舞が喜びの念仏となるのであり、五濁末法の世弥陀を仰ぐことその事が限りなき法悦に外ならない。身命を仏に、またはその代官としての知識に譲り奉つて手足居動わが境界にあらず、機の功を断ち随順仏願の体にあれば、物我またおのずから絶すという。

四

自なるものの三業を離れて念仏するを離三業の念仏という。能信の機は自力に同ずるからである。所領解の念仏と無安心の念仏とは同義である。能信は三業清浄ならしめ虚仮を嫌う心品によるから他力の中の自力である。願往生心は機に拘るともいうが、初発の心であり、能信から所信に至るを欣慕心という。なおそれは六識分別の妄心なるが故に彼土の修因にあらずと喝破する。宗祖の語に、人我願が切なれば往生すべしと思つているが、機功に堕するものである。行者が待つているから来迎がある、これも機功である。自己によつて見仏するならば自力の見性であり、離度量の念仏が自も他もない、他力全一の声々である。三祖智得曰く「他力の称名の上には欣ぶべき極楽もなく恐るべき地獄もなく、一声の間に無生を証す」と。鸞師は無輩品と釈す、しからば三福九品は機において発願せしむる方便であり、一立古今然の浄土何ぞ機情の隔歴に落ちんやという。三輩九品は鏡中の影の如く、浄土の体は名号であり、六字の外に機法なく、機法不二の名号だから機功を用いず離三業である。

宗祖は名号の外に心があるを二心雑乱といつている。わが起こす妄念であつてはならない、熊野の神授に照合するならば信不信浄不浄を弁ぜずとあることが三業の外の念仏と領解される。信不信とは機功に拘ることであり、六識散乱の凡夫深く信じて念仏礼拝することができない。熊野山頭神韻縹渺の中に宗祖の感得があり、ここに所領解の安心がある。四大虚妄の身命を捨て、仏と知識と一体と観じて吾を吾とせず、善悪ともに障らず是非に偏らず、有心は生死の道無心は是涅槃と、念々声々がすなわち涅槃の道であり、独一念仏である。無心とは離念ともいい、仏知識にすべてを任せ奉ることであり、心に名号を入れるのではなく、名号に心を入れ、念仏が念仏をするのであり、名号が名号を聞くのである。凡夫の心には決定なしと断ずるのである。往生は心品によらない、心品、心の持ちようを捨て名号に任せば名号は他力である。

『散善義』に仏の捨てしめ給うを捨てとは自の意業を離れることであり、遣行とは自の口業を離れることであり、遣去また身業を離れることである。ここに乗師の言を挙げている。「離三業念仏領解人者。自成迷悟不二位。菩薩道不レ行。凡夫不レ断二漏身一獲二得生死当体仏果一云云」。乗阿は徳川期国学と宗学の泰斗である。これ一乗無価の称名であると、如海は離三業の念仏と評する。以上離三業の宗意玄秀に承くと断つている。

（註を割愛する）